

2021/10/29

## 2021 年度第 6 回「文理接続」研究会

『いま言葉で息をするために——ウイルス時代の人文知』（勁草書房、2021 年）

第一部「思想」pp.1-126 要約（担当荒金直人）

## 1. カトリーヌ・マラブー

「隔離から隔離へ」（2020 年 3 月）

1743 年 5 月、ペストの流行を受けて、ルソーの乗っていた帆船は三週間の隔離を義務付けられる。乗客は、船に残るか隔離病舎に移動するかを選ぶことができた。誰もが帆船に残ることを選ぶ中、ルソーは隔離病舎を選び、そこで、無人島で独り新生活を構築するロビンソン・クルーソーのような、孤独な生活を開始する。マラブーは、このルソーの選択を、「隔離からの隔離」と解釈する。集団的な孤立状態から孤立して自分の島を作るのである。この島こそが、「私が私自身でいられる場所」であり、「心の空間」であり、「誰も入ってこられない、だが同時に、他者との交流の条件でもあるような〈場のなかの場〉」なのだと言う。ここで、「孤独によって私自身が孤立状態から守られ始める」(p.6)。

## 2. ジャン＝リュック・ナンシー

a.「別の精神性」（2020 年 6 月）

●ウイルスの感染によって私たちの身体は私たちにとって「よそ者」になると言えるだろうか。⇒「実際のところ、私たちの身体はつねによそ者なのであり、健康な時でさえそうなのです。呼吸、心臓、消化器、神経、欲動に関して、身体はつねに自律しています」(p.16)。●現在のような他者と距離を取る関係の例外性についてどう考えるか。⇒現状がそれほど例外的だとは思えないが、ハビトゥス〔知覚・思考・行為に関わる無自覚的な習慣〕に混乱が生じていることは確かであり、私たちの社会について考えるきっかけになる。●コロナ禍において警察権力の行き過ぎはあったのか。より長期的に見て、統治者との関係にどのような危険があるのか。⇒パンデミックによってそのような力関係が激化したということはないが、フランスの特殊性として、国家が象徴という役割や管理者という役割を過度に担っているという点がある。●「土台のない状態」というテーマについて。⇒「民主主義は、あらゆる〈形象〉が崩壊して土台がない状態から生じるのであり、形象なき発明を必要とするのです。それゆえに民主主義は、危機に瀕し、絶え間なく再発明をつづけることを運命づけられています」(p.20)。●コロナ禍は、例えばルノーの工場の閉鎖や解雇の脅威など、経済機構の欠点を改めて示したが、それは資本主義を劇化させる方法にしか向かっていない。⇒資本主義は疲弊しつつある。「産業の発達した私たちの社会はみずからをうまく支えることができていません」(p.24)。●警察の暴力について。⇒アメリカでの人種問題とフランスでの警察の暴力は異なる問題であるが、双方に共通しているのは、国家との関係が根本的に動揺しているということである。その根底には、私たち自身の実存の解釈に関わる問題がある。私たちは実存を「運命」として、次に「征服」として解釈してきた。それらには原因や目的があった。今や私たちは、原因や目的を前提せずに、「理由がないこと」として実存を捉えなければならない。●「理由がないこと」について。⇒「つねに人間を根底において捕らえ、駆り立ててきたもの〔…〕の新たな可能性にかたちを与えることは、あらゆる世代の仕事です。これからのもつと

も大きな問題は、別の精神性です」(p.27)。「人類の大部分は宗教的な資源にもとづいて生きていますが、それが科学技術の偏在を妨げることはありません。これが、現在の日常生活の構造です。こうした状態を変化させなければなりません」(p.28)。

#### b.「生政治症候群」(2020 年 10 月)

「生政治」という語は、当初、「生の条件への政治の介入」(p.34)という「政治的権力が行使する特定の実践の総体」を指すためのものであったが、間もなく、「統治の実践に関する重要な側面、そして支配的な側面」(p.32)示すようになった。そして生政治は、私たちの「生」に介入する「悪政」の指標になった。つまり、「私の生に触れるな」という主張が生政治に対置される。しかし、「生政治」(バイオポリティック)という用語を構成する二つの語を見ると、一方の「バイオ」は、実際には、人間の実存から区別された生物学的な生、ないし身体的な性能を意味しており、他方の「ポリティック」は、現状では、国家や国民ではなく、巨大なエコテクネー〔経済技術〕複合体の様々な管理拠点を意味している。〔つまり、「生政治」はエコテクネーによる身体性能の管理に取って代わったのである。〕したがって、コロナ禍における「唯一の首尾一貫した「生政治」的対応」(p.35)とは、コロナの蔓延を放置することである。〔それこそが、国家の論理ではなく経済技術複合体の論理に従って、人間の実在ではなく身体性能に介入することである。〕「今後の私たちにとって必要なことは、政治の手前ないし彼方に見出される——そしておそらく、生の手前ないし彼方に見出されるだろう」(p.36)。言い換えるならば、凡庸で空虚な「権力のマネジメント」(p.37)とは異なる「政治」について考えなければならない。「本質的なことは、一方では〔政治的な〕集合体を作る可能性に、他方ではごく少数の者が富を独占しているというスキャンダルにある」(p.38)。

### 3. N・キャサリン・ヘイルズ

#### 「新型コロナ——ポストヒューマン・ウイルス」(2020 年 4 月)

新型コロナウイルスは少なくとも二つの意味でポストヒューマンである。①ウイルスは人間の意図、欲望、動機に何の関心もない。②進化の観点からは人間とウイルスは正反対の戦略を採ってきた。つまり人間は複雑化（認知的複雑性、言語の発達、社会構造、技術装置など）、ウイルスは単純化（宿主である細胞より小規模の遺伝情報に基づき迅速に自己複製する構造）という戦略を採ってきた。最近の研究でも、ウイルスの構造の単純性が複雑な戦略に基づくものであることが示されているようである。このウイルスが人間にもたらした災厄から我々は何を学ぶことができるのか。「人間は自分たちの生態的ニッチのなかでは優位に立っている。だが、ウイルスは、私たちのニッチと重なる他の多くのニッチが存在し、それらがまったく異なるルールで作動しているということを恐ろしい力で思い出させる存在だ」(p.50)。そして、我々が何の準備もできていないことが明らかになる。「もちろんウイルスの影響に対する準備はできていない。だが、同様に重要なのは、私たちが哲学的課題に対処する準備もできていないということだ。その課題とは、人間に固有の能力と、その限界や相互依存性を公平に鑑みながら〔、〕みずからの状況を再概念化していくことである」(p.50)。相互依存性に関しては、ウイルスが生命形成の初期の重要な諸段階に関与した可能性や、人間の幹細胞から古代ウイルスの DNA が発見された事実などを、考慮に入れることができる。つまり、新型コロナウイルスがポストヒューマンであるとすれば、幹細胞に存在するような他のウイルスは、根

本的にはヒューマンであると言える。「私たちはこのような複雑な相互依存関係を記述し、分析するための諸々の概念や語意を徹底的に再概念化しなければならない」(p.52)。検討が必要な三つの言葉を提起しておく。①共通の種としての人間（諸属性を共有する人間という種について）、②生命体として共生する種としての人間（他の生物種との関係）、③サイバースペースにおいて共生する種としての人間（人工知能などの人工物との関係の中で形成される関係）。

#### 4. アレクサンダー・ガルシア・デュットマン

「共犯者」(2020年4月～6月)

①「パンデミックは、多かれ少なかれ曖昧ないし隠れた仕方でおおむね予期されていたというナンシーの〔保守的な〕考え」に対して、デュットマンは、「こうした予期は、出来事が引き起こすことになる奇妙な遡及的認識可能性と切り離せないものだ」と考える(p.62)。予見することのできなかった出来事が一旦起こると、その出来事が非常に大きな影響を与えた場合、そしてその出来事が否定されない限り、その出来事は予見できたかのように事後的に感じられるのである。ウイルスは保守性の共犯者になる。②コロナ禍の状況において、大学や特に美術学校の人々は、ラディカルな社会批判を行う代わりに、ありきたりな言説を再生産し、その一方で、デジタル・コミュニケーションを肯定的に受け入れた。しかし、ここで肯定されるある種の真正性や関係性やテクノロジーは、体制への順応性をもたらすべく結託している。蔓延するウイルスは、「最先端テクノロジーとその使用をイデオロギー的に正当化する共犯者となる」(p.64)。③蔓延したウイルスは、純粋主義と厳格主義の共犯者となる。過去二十五年ほどの間に、多くの新たな純粋主義者やピューリタン〔宗教的・道徳的厳格主義者〕たちが、可能な限り徹底的に日常生活や交際を規制することに着手した。連帯や社会的結束は無視されることになる(p.65)。以上の三つの傾向は、いずれも遡及的認識可能性の効果によって強化されている。これらの傾向が実は限られた射程しか持たないということ忘れてはならない。〔※荒金は特にこの観点に注目した。〕

『シュピーゲル』誌における劇場監督カストルフの対談について。カストルフは、国のコロナ対策への反対意見に対する弾圧を批判する。その論点は、パンデミックが煙幕と化しており、社会的不平等、気候変動、戦争、移民などの問題の緊急性を隠蔽してしまっているということ、そして他方で、生命維持が絶対的価値として神聖化されていること、などである。デュットマンの同僚や友人の多くはカストルフの挑発的な考えには同意しなかった。しかし、コロナ禍において「行動や思考の画一化が確立すればするほど、不同意の声を聞かなければならない」(p.70)。「本当の共犯者は、自分たちが守ると称している当のもの、つまり民主主義を安全な場所にしてしまうことでその浸食を早めている人々なのである」(p.71)。

陰謀論について。「陰謀論」という概念は、政府が、現在の情勢下では止むをえず妥当だと弁護する基本的市民権の制限に対して反対する者を糾弾するさいに用いられている鍵概念である」(p.71)。「疑念は、私たちが生きていくうえでもっとも基本的な信念や、それなしでは意味のある人生などありえないような既存の実践を対象としている場合には、完全に不合理ではないにしても、理不尽なものであことが判明する」(p.72)。「陰謀論の拒否は、それが狂っているように見えるか否かにかかわらず、そこに内在する真実の契機を見失うべきではない。困難な点は、権力の領域では、ありえそうなものとありえそうにないもののとの区別がたえず霞んでしまっているということである」(p.73)。

## 5. エマヌエーレ・コッチャ

「世界規模の新たな隠遁生活を反転する」（2020 年 7 月）

私たちは常に「家」という観念に取り憑かれてきた。生態学〔エコロジー〕という名が、地球を一つの家として考えることを促す。生物の分類体系を確立したリンネの弟子ビベルクは 1749 年に『自然のオイコノミア』という生態学の論文を出版した。彼らは自然の中に家政的秩序を見た。自然のエコノミーを経済のエコノミーから区別するために 19 世紀に「エコロジー」という語が造られた。このような経緯から、「生態学は知らないうちに家父長的な神話をその中心に残している」(p.94)。家とは秩序と有用性の空間である。地球上の生命が一つの家に住んでいると言うことは、あらゆる生命が秩序を尊重し、有用性を生み出していることを意味する。例えば外来種が生態系にとって有害であると考えるとき、このことが前提とされている。しかし「実のところ、私たちは自然にとって何が有益で何が有益でないのかについては何も知らない」(p.95)。そして、「地球を巨大な家と考えることは、人間以外のすべての生き物が文字通り自宅監禁されていると考えることだ。私たちは、他の生き物に対して、家を離れ、家の外で暮らし、政治的、社会的な生活、家庭外の生活を営む権利を認めない」(p.95)。ステイホームを課された現在の状況は、家に関する一つの変化について考えることを促す。つまり、「家庭内空間を新たな政治的空間へと反転させる」ことが必要である(p.96)。私たちは単なる空間としての「家」に直接住んでいるのではなく、家具などの「物」とのアニミズム的な関係の中に住んでいる。そして、「生態学——そして政治——は、一般的に家よりもキッチンから発想するべきだ」(p.102)。「家庭内革命」は、「生き物が自分たちの肉を交換し、互いを気遣う舞台」であるキッチンから始まる。「家と都市とを大きなキッチンであるかのごとく考えることは、家父長的な伝統を〔…〕気遣いの空間へと転覆させることを意味する」(p.103)。

## 6. ペーター・サンディ

「ウイルス時代」（2020 年 4 月）

コロナ禍が強い隔離生活における我々の不動性は、大規模な動員によって可能になっている。「コロナウイルスの流行が引き起こした危機〔…〕によって現れたのは、超スピードと静止状態との前代未聞の共存である」(p.112)。この状態に、時間に関わるもう一つのパラドクスが重ねられる。「私たちは一夜にして、比較を絶する驚きとともに目覚めたのである。つまり、結局のところ何も変わっておらず、何も起こっていないにもかかわらず〔…〕」。新自由主義による衛生インフラの解体、短期の研究を優先する科学技術政策、動物の生息地の破壊などが、予見されていた大惨事に我々を導いた。「けっして何か新しいことが私たちに降りかかったわけではないのである。むしろ、私たちが知っていながらも目を瞑ってきたプロセスが、私たちの眼前で、たちどころに結晶化しているのである」(p.113)。「この同時的でありながら非同期的なこれら複数の時間」(p.114)を理解するために、フーコーによる「疫病」と「風土病」の区別を参考にする。前者は「生命に突然襲いかかる死としての病気」であり、これには「規律的」な権力技術が対応し、個体としての身体が問題になるのに対して、後者は「生命に忍び込み、絶えずこれを蝕み、減少させ、弱らせる恒常的な死としての病気」であり、これには「保障的かつ調整的」な権力技術が対応し、人間集団の生物学的社会的プロセスが問題になり、生政治が問題になるとされる。我々にとっての問題は、コロナウイルス

に対応するのはどのような権力体制であるのかということである。この点に関しては、「エコロジー」や「管理社会」に関する考察も考慮に入れなければならない。当面の結論として、ここで問題になっているのは、疫病的なものでも風土病的なものでもなく、この二つのカテゴリーを混交させるような、いわば「汎風土病」であり、それが複数の時間差の中で展開していると言える。「それゆえ、コロナウイルスと名づけられた出来事は、ひとが当の出来事をその中に書き加えたいような疾病分類学的かつ政治的なパラダイムを越え出るのである。コロナウイルスという出来事はこのようなパラダイムを危機に晒す、と言いたくなる。ただし危機というカテゴリーにすら収まりきらないということがなければ、という話ではあるが」(p.119)。

〔以上〕